

2

平仮名が紡ぐ
物語文学

新しい学習指導要領では、日本の文字文化の豊かさを理解することが、これまで以上に求められています。今回は、『源氏物語』をはじめとする物語文学を取り上げて解説します。



九州国立博物館長
島谷弘幸

1953年岡山県高梁市生まれ。東京教育大学卒。小松茂美博士に師事。東京国立博物館副館長を経て、2015年から九州国立博物館長。文部科学省教科用図書検定調査審議会委員(08～17年度)など歴任。

現在の日本語表記において、漢字と仮名交じり文はごく自然に使われているが、これは奈良時代から平安時代にかけての先人が工夫を重ねて、美しい平仮名(女手)を生み出したことが大きい。これによって、自らの言葉で思想や文学などを表現することができるようになったのである。この時期は、『源氏物語』をはじめとする物語文学が成立するのと同様じ時代である。この日本独自の仮名の成立が、物語文学の成立を促したことは疑いないであろう。

ところで、物語といえば『源氏物語』が思い浮かぶのではなからうか。なかでも、現存最古の「源氏物語絵巻」(徳川美術館・五島美術館蔵)はあまりにも著

名である。その詞書は、五人の能書の寄合書きであることが明らかにされている。執筆を分担した筆者が腕を競って、力強く、あるいは流麗に、さらには繊細にも、リズムカルにも筆を運んで書き連ねていった。

ただ、これだけ世界的にも著名な『源氏物語』であるが、他には平安時代書写の写本は確認されないのが不思議である。実は、その答えの一つと思える資料がある。藤原行成を祖とする能書の家である世尊寺家の五代にあたる伊行が、娘の建礼門院右京大夫のために書き与えた書道の秘伝書である『夜鶴庭訓抄』の冊子の書式を述べたくだりの最後に、「物語は能書の人は書かないものである。他の

人から依頼されても何とか言い逃れして書くな」という記述がある。世尊寺家では家伝の教えを守ったのであろう。他の能書も同様であったのかもしれない。物語に対する評価が低かったとも思える記述である。しかし、新たな文学である物語への関心は広がり、能書ならざる人々に書き継がれて残り、やがて藤原定家によって『源氏物語』は高く評価されることになる。

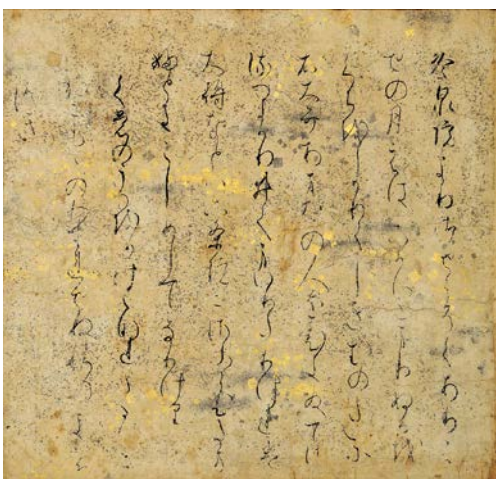
他の物語に範囲を広げても、平安時代書写の物語は伝藤原公任筆の「伊勢物語切」(個人蔵)が確認されるのみである。鎌倉時代になると、ようやく伝藤原為家筆の「伊勢物語切」(東京国立博物館蔵)や重要文化財の「松浦宮物語」(東京国

門家でない我々が原語で千年前の文学を鑑賞できるのは、日本語の特性であるかもしれない。

立博物館蔵)あるいは『源氏物語』と『狭衣物語』の歌を左右に番えて歌合とした伝藤原為家筆「姫路切」などの存在が知られる。新しい文芸作品である物語に対する評価が定着するのに時間を要するということが、これらによって理解できるであろう。しかし、潜在的には多くの人々に支持されていたことは、「源氏物語絵巻」の存在からも想像にたたくない。やがて、物語が評価を高め、文学、歴史などの物語が多くの人々に大切に受けつがれながら、享受されていくことになる。

説話物語の代表ともいえる『竹取物語』では、十四世紀の北朝の天皇である後光厳天皇の筆と伝える断簡の存在が確認されている。現在、近世に作られた「竹取物語絵巻」が国会図書館や立教大学などに所蔵されている。国会図書館蔵の絵巻では、詞書に金泥の下絵を施した華麗な料紙を用いて、行書体と草書体に仮名を交えて美しい連綿を駆使して書き連ねられている。また、和歌の部分を改行してわかりやすくし、一部の段落の末尾には散らし書きでの執筆を見せており、手許に置いて鑑賞する調度として制作したことが明らかである。

また、長編の『平家物語』の全巻を絵巻化した岡山の林原美術館蔵の「平家物



源氏物語絵巻 絵巻二
平安時代 十一世紀 五島美術館蔵

語絵巻」も現存している。こうした絵巻には物語だけではなく、寺社の縁起を普及するために作られたものもあり、絵画化された段落を見せながら、それに相応する詞書の部分を読み聞かせて理解を助ける「絵解き」にも用いられた。このため、絵巻の多くは比較的読みやすい書風で書かれることが多い。当時に盛行した書風での書写であり、各時代の美意識が反映したものとして注目される。

また、『源氏物語』なども谷崎潤一郎、与謝野晶子など著名な作家による口語訳がわかりやすいのであるが、必ずしも専

